

万葉歌に育まれた風土―真土山・妹背山歌を中心にして―

市瀬 雅之

はじめに

犬養孝『万葉の風土続』が「はしがきに」(1)に、

われわれは、時代からはなれ、歴史社会的関連からはなれて生きられないやうに、土地からはなれ、風土的関連からはなれて生きることはできない。それは万葉の歌を生み出した人々もまた同じである。したがって、万葉の歌を、より正しく理解し、より正しくその構造を明らかにするためには、この二つのものはなれることはできない。

こんにちまで、万葉歌の歴史社会的究明は多々行われてきてゐるが、風土的関連の究明は、なによりも実地のたびかさなる調査を必要とし、かつ、風土が人間にとつて多分に無意識的領域をもつものによるのであるうか、いまだ研究の緒にいた状態といつてよい。人間が風土から片時もはなれられないとすれば、歌の風土的関連の実相の解明も、また当然なさねばならない。ことに、実地に即するところきわめて深い万葉歌である。

と記した万葉風土論は、臨地研究を旺盛にし、歌を碑として顕彰した。その数は今も増え続け、二千三百基(2)を超える。建立された万葉歌碑は、新たな観光資源として、現地に歌を楽しむ象徴となつてゐる。

これほどまでに大きな力を発揮した万葉風土論ではあるのだが、『万葉集』に歌を読み返してみると、詠み込まれた景色や景観は、臨地に求められるばかりでなく、作歌の中に形象されてゆく可能性をも考究しておく必要がありそうに思う。

本稿では、古南海道の往来に詠出された真土山(本稿では、多様な原文表

記に対応するため、訓読表記に「まつち山」を用いる)・妹背山(論の展開上、原文表記を優先して記す)歌を考察することで、歌に表現された景の在り方を具体的に考察しておく。

一、「あさもよし」と「まつち山」に形象される景

大和国から紀伊国への羈旅は、まつち山を越えるところからはじまる。

(大宝元年辛丑の秋九月、太上天皇、紀伊国に幸せる時の歌)

あさもよし紀人ともしもまつち山行き来と見らむ紀人ともしも

朝毛吉 木人乏母 亦打山 行来跡見良武 樹人友師母 (1・五五)

右の一首、調首淡海

右の一首は、『万葉集』中に作歌年次を記す最も早い例である。『続日本紀』を開くと、大宝元年(七〇二)八月三日に大宝律令が成り、八日には六道に明法博士を遣わして新令の講義が開始された。その翌九月の九日条に「天皇、紀伊国に幸したまふ」とはじまる。

初句の「あさもよし」は、早く下河辺長流の『万葉集管見』(3)が「あさもとハ、麻布の裳なり」と指摘し、契沖が『万葉代匠記』精撰本(4)に、昔ハ紀ノ国ヨリヨキ麻衣ヲ出セルナルヘシ。然レハ玉藻吉讚岐トツ、クル如ク、名物ヲ以テ呼テ、木(ト)云字ニ付テオケル詞ニハアラヌナリ。

と記す内容がもつとも有力視されてきた。

麻衣着ればなつかし紀伊の国の妹背の山に麻蒔く我妹(7・一一九五)

麻衣 著者夏樞 木国之 妹背之山二 麻蒔吾妹

の存在が、主な根拠となっている。

村瀬憲夫「あさもよし紀伊万葉」(5)は、こうした見方を、

その妹背の山の近くに「麻生津」(那賀郡那賀町)がある。いかにも一面麻の生い茂った地というイメージをもつ。

また海南市には「且来」、西牟婁郡上富田町には「朝来」がある。この「あつそ」が「麻生」と関係があるとすれば、やはり紀伊国と麻との結びつきを思わせる資料となる。

と補強する。ただし、『延喜式』の巻二十四「主計」が、紀伊国の特産物として絹・綿・紅花を記すが麻を含まない。地名の「麻生津」についても、本来は「大津」であったものが、一一九五番歌の影響で「麻生津」に変化した可能性をも述べ、議論に余地を残すことを示唆する。

また村瀬前掲書は、賀茂真淵『冠辞考』巻一(6)が、

木上宮と人万呂のよめるは、時代凡同じきが中に少しさきなる歎。然れば紀伊に冠らせしを本として思ふべからぬもの也

と述べたことに着目して、柿本人麻呂が「高市皇子尊の城上の殯宮の時に、柿本朝臣人麻呂が作る歌一首」(2・一九九)にて「あさもよし 城上の宮を」と詠出した表現を初出とし、高市皇子と同じ壬申の乱を体験した調首淡海が、人麻呂歌を聞き、「キ」の音を介して、「あさもよし紀」へと転じた可能性を指摘する。高市皇子の薨去が持統十年(六九六)七月十日であることを考えると、時間的には可能である。しかし、「あさもよし」の意味を明らかにしていない。村瀬憲夫「笠金村と紀伊」(7)が、「紀伊国への親愛と憧憬の思いを含みもって歌われた枕詞だったのである」と説くが具体的ではない。解釈することが難しいからなのだが、紀伊国に冠せられている枕詞だけに、本稿はまずその意味を探ることから検討をはじめ、

『万葉集』中に「あさもよし」を使用する歌を、

朝毛吉―木上きのの宮を

(2・一九九)

朝裳吉―城きの於の道ゆ (13・三三二四)

朝毛吉―紀人乏しも (1・五五)

朝裳吉―紀へ行く君が (9・一六八〇)

麻裳吉―紀道に入り立ち (4・五四三)

麻毛吉―紀の川の邊の (7・二二〇九)

と順序立てた澤瀉久孝「枕詞を通して見たる人麻呂の獨創性」(8)は、「朝裳」に原義を見出し、「朝に裳」を「着る」の意として「紀伊」に掛かる」と推定した。作歌年次が右のとおりならば、「朝」の表記が、原義に近い内容を備えている。「毛」と「裳」の使用には、「朝」と「麻」ほどの偏向性は認められない。併用されていたと捉えた方が穏やかであろう。

「朝」という時間に着目すると、次の歌が留意される。

弁基の歌一首

まつち山夕越え行きて廬前の角太川原にひとりかも寝む(3・二九八)

亦打山 暮越行而 廬前乃 角太河原尔 独可毛将宿

右は、或は云はく、弁基は春日藏首老の法師名なり、といふ。

真土山を「夕越え」したところに、廬前の角太川原に「ひとりかも寝む」とする事態が生じている。この歌に「あさもよし」との表現は使用されていない。通常の宿泊ではないので、このように詠まれているのであろう。

紀伊国への羈旅に宿泊を考えた場合、まつち山を越える手前の宇智に次の歌が存在することが注意される。

天皇、宇智の野に遊獵する時に、中皇命、間人連老に献らしむる

歌

やすみしし 我が大君の 朝には 取り撫でたまひ 夕には い寄り

立たしし みとらしの 梓の弓の 中弭の 音すなり 朝狩に 今立

たすらし 夕狩に 今立たすらし みとらしの 梓の弓の 中弭の

音すなり

(1・三)

反歌

たまきはる宇智の大野に馬並めて朝踏ますらむその草深野 (1・四)

「朝狩」は、次の歌を参考にすると、

軽皇子、安騎の野に宿らせる時に、柿本朝臣人麻呂が作る歌

やすみしし 我が大君 高照らす 日の皇子 神ながら 神さびせず

と 太敷かす 京を置きて こもりくの 泊瀬の山は 真木立つ 荒

き山道を 岩が根 禁樹押しなべ 坂鳥の 朝越えまして 玉かざる

夕さり来れば み雪降る 安騎の大野に はたすすき 篠を押しなべ

草枕 旅宿りせず 古思ひて (1・四五)

短歌 (1・四六、以下略)

安騎の野に宿る旅人うちなびき眠も寝らめやも古思ふに

のように前泊をとまなう。遊獵はもちろん野で行われるのだが、宇陀の中之庄遺跡に留意すると、宿泊地は街道に近く位置する。宇智にも同様の宿泊地が設けられた可能性を推定する。そこが行幸の宿泊地にもなり得たのではないのかと考えての引用である。同地でなくとも、宇智に宿泊することのできる条件があることの示唆が得られる。

「大宝元年辛丑の秋九月、太上天皇、紀伊国に幸せる時の歌」には、

巨勢山のつらつら椿つらつらに見つつ偲はな巨勢の春野を

右の一首、坂門人足 (1・五四)

と詠まれている。秋に春の景を想起させるという趣向は、慌ただしく通り過ぎる最中より、ゆったりと余裕のある時間の中に、伸びやかに披露されることが求められる。宿泊地での宴の席において、昼間通り来た巨勢を思い返し、土地への讃美を込めて披露されたと考えるのが穏やかであろう。それは紀伊国へ入ってからより、大和国に留まるうちに詠まれることが望まれるのではないだろうか。巨瀬或いは宇智での宿泊が想定される。

『続日本紀』を開くと、天平神護元年(七六五)十月十三日にはじまる

紀伊国への行幸は、

(前略) 是の日(十三日)、大和国高市郡の小治田宮に到りたまふ。

壬申(十四日)、車駕、大原・長岡を巡り歴、明日香川に臨みて還りたまふ。

癸酉(十五日)、檀山陵を過ぐるときに、陪従の百官に詔して。悉く下馬せしめて、儀衛にその旗幟を巻かしたまふ。是の日、宇智郡に到りたまふ。

と、宇智郡への到着を記している。「甲戌(十六日)、進みて紀伊國伊都郡に到りたまふ。」とあることから、宇智郡に宿泊した様子がかがわれる。巨瀬から宇智のあたりでの宿泊を視野に入れると、翌朝に紀伊国へ足を踏み入れる喜びと祝意が「あさもよし」に、「朝毛吉」或いは「朝裳吉」と表記させた可能性を指摘したい。紀伊国への行幸や羈旅の実態を反映した表記と考えられる。

こうした理解を「大宝元年辛丑の冬十月、太上天皇・大行天皇、紀伊国に幸せる時の歌十三首」(9・一六六七〜一六七九)に続く、

後れたる人の歌二首(一首略)

あさもよし紀伊へ行く君がまつち山越ゆらむ今日そ雨な降りそね

朝裳吉 木方往君我 信土山 越濫今日曾 雨莫零根(9・一六八〇)

に当てはめてみると、「後れたる人」が「朝裳吉」と早朝の滞りない出立に祝意を示し、紀伊国へ入る君がまつち山を越える姿を思い浮かべながら、今日だけは雨よ降るなど祈願する内容を読み取ることができる。

大和国内の宿泊先から紀伊国へ足を踏み入れる喜びを含み込んで、「あさもよし」が「朝毛」(1・五五)或いは「朝裳」(9・一六八〇)と記されたと考えられる。

「あさもよし」が、「朝裳吉」へと変化をみせはじめるのは、次の歌が早い。

神龜元年甲子の冬十月、紀伊国に幸せる時に、從駕の人に贈らむがために、娘子に詠へられて作る歌一首 并せて短歌（反歌後掲）

笠朝臣金村

大君の 行幸のまにま もののふの 八十伴の男と 出でて行きし
 愛し夫は 天飛ぶや 軽の路より 玉だすき 畝傍を見つつ あさも
 よし 紀伊道に入り立ち まつち山 越ゆるらむ君は もみち葉の 散
 り飛ぶ見つつ むつましみ 我は思はず 草枕 旅を宜しと 思ひつ
 つ 君はあるらむと あそそには かつは知れども しかすがに 黙
 もえあらねば 我が背子が 行きのまにまに 追はむとは 千度思へ
 ど たわやめの 我が身にしあれば 道守が 問はむ答へを 言ひ遣
 らむ すべを知らにと 立ちてつまづく (4・五四三)

天皇之 行幸乃随意 物部乃 八十伴雄与 出去之 愛夫者 天翔哉
 輕路從 玉田次 畝火乎見管 麻裳吉 木道尔入立 真土山 越良武
 公者 黄葉乃 散飛見乍 親 吾者不念 草枕 客乎便宜常 思乍
 公将有跡 安蘇々二破 且者雖知 之加須我仁 默然得不在者 吾背
 子之 往乃萬々 将追跡者 千遍雖念 手弱女 吾身之有者 道守之
 将問答乎 言将遣 為便乎不知跡 立而爪衝
 歌の内容に注意すると、「天飛ぶや 軽の路」から「玉だすき 畝傍を
 見つつ」と進む道行きにはじまる。都が平城京に遷された後は、藤原京や
 飛鳥京周辺も道行きを経路の中にも含まれて表現されている。

「麻裳吉」は、「麻裳」が衣装を具体的に表現して「吉」と讃えている。
 こうした表記が可能になる理由を考えてみると、「あさもよし」が掛かる
 「紀伊」が、「木」と記されていることが留意される。加えて、「紀伊道
 に入り立ち まつち山」と続いていることに着目したい。

まつち山の表記に目を向けると、大宝元年を記す前掲五五番歌には「亦
 打山」と記されている。大宝元年（七〇二）二月に遷俗する以前の「弁基」

を作者名に記す二九八番歌にも「亦打山」と記されている。同じ「亦打山」
 と記される次の歌は、

（羈旅にして思ひを発す）

いで我が駒早く行きこそまつち山待つらむ妹をきてはや見む
 乞吾駒 早去欲 亦打山 将待妹乎 去而速見牟 (12・三二五四)
 と、「まつ」に「待つ」の意を想起することができる。ただし、表記に反映
 されるまでには至らない。類似の表記として「又打山」と記す次の歌を視
 野に入れると、

（物に寄せて思ひを陳ぶる）

橡の衣解き洗ひまつち山本つ人にはなほ及かずけり (12・三〇〇九)
 橡之 衣解洗 又打山 古人尔者 猶不如家利
 のように、橡色の衣を解き洗ひ再び打ち直す行為が、「又打」を導き出す
 序詞として使用されていることが注目される。『続日本紀』には天平十一
 年（七三九）三月二十八日の出来事として記される「石上乙麻呂卿、土左
 国に配さるる時の歌三首 并せて短歌」（6・一〇一九〜一〇二二）において
 も、

石上 布留の尊は たわやめの 惑ひに困りて 馬じもの 繩取り付
 け 鹿じもの 弓矢困みて 大君の 命恐み 天離る 夷辺に罷る
 古衣 まつち山より 帰り来ぬかも (6・一〇一九)
 石上 振乃尊者 弱女乃 或尔縁而 馬自物 繩取附 肉自物 弓筈
 困而 王 命恐 天離 夷部尔退 古衣 又打山從 還来奴香聞
 のように「古衣」が「又打山」を修飾し、わびしい旅情を表現している。
 大和国から紀伊国へと羈旅を繰り返す中で、「紀伊」が「木」と記され、
 その先に続くまつち山が、「亦打山」或いは「又打山」と記されることで、
 衣に関わる内容が連想されてゆく可能性を考えることができる。実際に「ま
 つち」には、

(羈旅にして作る)

白たへにほふまつちの山川に我が馬なづむ家恋ふらしも

白栲尔 丹保布信土之 山川尔 吾馬難 家恋良下 (7・1192)

と、「白たへにほふ」との表現が直接冠せられている例も認められる。

それだけではない。一一九二番歌に記された「まつち」には、「亦打」或いは「又打」との表記が用いられていない。「信土」と記されていることが目を引く。「信土」は直ちに「マツチ」と読むことはできないが、「信」にまことで疑いのない意味を捉えたと、「真木立」(1・四五、2・一九九、6・九三、13・三二九)の「真」と同じ讚美意識を見出すことができる。

「白たへにほふまつちの山川」と表現される「まつち」には、既に「白たへ」が美しく冠せられているので、「亦打山」或いは「又打山」と表すところに魅力はない。「白たへにほふ」との美しい景にふさわしく土地誉めの意を込めて「信土」と記されたと考えられる。前掲の「後れたる人の歌」(9・一六八〇)においても、「朝裳吉」と表記した内容が、既に朝着る裳の意を備えているので、「亦打山」或いは「又打山」と表記されていない。「信土山」と記すことで積極的に土地を讚美したと考えられる。

前掲五四三番歌が「真土山」と記していることにも同じことがいえる。真に優れた土山を「越ゆらむ君」の眼前には「もみち葉の 散り飛ぶ見つつ」との美景が具象化されている。

これらの用例を振り返ってみると、大和国から紀伊国へ入る古南海道に見出された「あさもよし」は、旅の実態に即した讚美表現として「朝毛吉」或いは「朝裳吉」と、早朝の時間軸を含み記されはじめる。これが「木(紀伊)道」に続いて、まつち山が「亦打山」或いは「又打山」と記されてきたところに、衣を編むイメージが観念として形象され「麻裳吉」との表記が加わる。五四三番歌はそれを積極的に用いているところに、新しい紀伊国の世界を詠もうとしている姿勢をうかがうことができる。

まつち山はこうした作歌の中に、「白たへにほふ」(7・1192)との表現が冠せられるようになると考えられる。

二、歌表現に形象された「妹背乃山」

まつち山を過ぎゆくと、やがて山間が狭くなる所に辿り着く。『日本書紀』大化二年(六四六)春一月一日の詔には、

凡そ畿内は、東は名壘の横河より以来、南は紀伊の兄山より以来、西は赤石の櫛淵より以来、北は近江の狭々波の合坂山より以来を畿内国とす。

と、畿内の南限として「兄山」と記されているところにあたる。紀の川に沿いながら狭い稜線を通過する際の地形が地名化したのであろう。

持統四年(六九〇)九月の紀伊国行幸時に詠まれたとみられる次の歌には、

勢能山を越ゆる時に、阿閉皇女の作らす歌

これやこの大和にしては我が恋ふる紀路にありといふ名に負ふ勢能山
此也是能 倭尔四手者 我恋流 木路尔有云 名二負勢能山

(1・三五)

と「勢能山」と記され詠まれている。阿閉皇女が「名に負ふ」と表現するところには、「勢」に「背」の意を認めている様子がかがわれる。「大宝元年辛丑の冬十月に、太上天皇・大行天皇、紀伊国に幸せる時の歌十三首」(9・一六六七〜一六七九)には、

勢能山に黄葉常敷く神岡の山の黄葉は今日か散るらむ(9・一六七六)
勢能山二 黄葉常敷 神岳之 山黄葉者 今日散濫

と、故郷の「神岡の山」の景が重ねられている。

小田事が勢能山の歌一首

真木の葉のしなふ勢能山しのはずて我が越え行けば木の葉知りけむ

真木葉乃 之奈布勢能山 之努波受而 吾超去者 木葉知家武

(3・291)

にも、羈旅の往来に勢能山が親しまれた様子がうかがわれる。村瀬憲夫「あさもよし紀伊万葉」⁽⁹⁾が指摘したように、早くは勢能山だけが存在していたのであろう。前掲三五番歌のように「勢」に「背」の意を見出す者は、「妹」の姿を合わせて求めてゆくことになる。「丹比真人笠麻呂、紀伊国に往きて勢能山を越ゆる時に作る歌一首」には、

栲領巾のかけまく欲しき妹の名をこの勢能山にかけばいかにあらむ

一に云ふ、「替へばいかにあらむ」 (3・285)

栲領巾乃 懸卷欲寸 妹名乎 此勢能山尔 懸者奈何将有一云「可倍

波伊香尔安良牟」

と、勢能山を「妹」と呼び改めるのはいかがかとの提案が詠まれている。

大宝元年(七〇二)三月に「弁基」から還俗した春日蔵首老が、これに、

春日蔵首老の即ち和ふる歌一首

宜しなへ我が背の君が負ひ来にしこの勢能山を妹とは呼ばじ

宜奈倍 吾背乃君之 負来尔之 此勢能山乎 妹者不喚(3・286)

と応えているところに、「妹の山(妹山)」の存在が疑われる。人麻呂歌集歌が早く、

(羈旅にして作る)

大穴道少御神の作らしし妹勢の山を見らくし良しも (7・1247)

大穴道 少御神 作 妹勢能山 見吉

右の四首(三首略)、柿本朝臣人麻呂が歌集に出づ。

と、「妹背の山」の意を詠出しているが、一般化されるに至らない様子は、見てきた他の用例が示すとおりである。勢能山に連想される「背の山」に妹が求められるところに、「妹背の山」との表現が観念的に形象されてゆくのであろう⁽¹⁰⁾。

「勢能山」から「妹背の山」への展開は、前節で着目した「神龜元年甲子の冬十月、紀伊国に幸せる時に、從駕の人に贈らむがために、娘子に誂へられて作る歌一首 并せて短歌 笠朝臣金村」(4・五四三〜五四五)の存在が注目される。

梶川信行「軽の道の悲恋物語」⁽¹¹⁾は、道行きに詠まれた軽の地に残された妻の姿を認め、允恭記の木梨之軽太子と軽大郎女の悲恋物語や柿本人麻呂の「柿本朝臣人麻呂、妻が死にし後に、泣血哀慟して作る歌二首 并せて短歌」(2・207〜216)が応用されていると指摘した。確かに道行きは「天飛ぶや 軽の路より」と「軽」を起点にしている。加えて歌の表現は、「玉だすき 畝傍を見つつ」と、その先に目を向けていることを見逃すことができない。第二反歌が、

我が背子が跡踏み求め追ひ行かば紀伊の関守い留めてむかも

吾背子之 跡履求 追去者 木乃関守伊 将留鴨 (4・五四五)

と示すように、作者に誂えられた「娘子」は、大和国から関の向こうに行くことができない。大和国から紀伊国にいる「吾背子」を思いやっている。長歌末尾に「道守が 問はむ答へを 言ひ遣らむ すべを知らにと 立ちてつまづく」と表現される「道守」も、大和国と紀伊国との境界を守っているのだから。「娘子」が紀伊国にいる「背子」を思いやっている内容からは、この歌が紀伊国へ入ってから披露されるために準備されたことが考えられる。

村瀬憲夫「笠金村と紀伊」⁽¹²⁾は、まつち山が「待つ」を連想させることに着目して、「第二義的ながら、主人公の娘子の「待つ」気持ちを強調する」という表現効果もたらしめている」と指摘する。また、第一反歌に、

後れ居て恋ひつつあらずは紀伊の国の妹背の山にあらましものを
後居而 恋乍不有者 木国乃 妹背乃山尔 有益物乎 (4・五四四)

と、「妹背の山」が詠まれていることに、

この妹背の山は、真土山の場合と同様、聴衆に紀伊国行幸の紀伊国を強調して印象づけ、聴衆の心に紀伊国の世界を大きく広げるといふ表現効果をもたらしていると言える。

と指摘し、

金村は極めて典型的・正統的であつ有名な紀伊国の風土を取り上げ、それを極めて典型的・正統的にそしてわかりやすく歌いあげ、大衆受けのする作品として、そつなくまとめあげた。

と説いた。わからないのは「典型的・正統的であつ有名な紀伊国の風土」と記される内容である。第一反歌の「妹背の山」は、早く人麻呂歌集（7・一二四七）に認められた表現ではあるが、必ずしも一般化していないことは既述のとおりである。

改めて長歌を読んでみると、「娘子」は「出でて行きし うるはし夫は」と家において、道行きを辿りながら、夫の姿を「あさもよし 紀伊道に入り立ち まつち山 越ゆらむ君」と思ひやっている。「道守」に止められる姿を想像すると、まつち山に「待つ」を思ひやることができる。紀伊国へ出立する「君」は、「麻裳吉」に加え、「もみち葉の 散り飛ぶ見つつ」と視覚的に捉えられている。娘子は「むつまじみ 我は思はず 草枕 旅を宜しと 思ひつつ 君はあるらむと」と想像し、「我が背子が 行きのまにまに 追はむとは 千度思へど」との心情を吐露する。ここに表象されているのは「我が背子」の姿ばかりでない。「たわやめの 我が身」の存在が顕在化している。「我が身」は遠く家にあり「我が背子」を思ひやることしかできないならば、第一反歌に、「妹背の山にあらまじものを」との希求が導き出されてくるのではないのか。金村は紀伊国へ入ってから披露する歌として、「まつち山」とともに「勢能山」だけではなく、傍らに希求された「妹」の姿をも含み込んで「妹背乃山」と積極的に表現した。表記に注意すると、前掲人麻呂歌集歌（7・一二四七）は「妹勢能山」と

記すに留まったのに対して、「妹」と「背」の在り方を明示している。そつなくまとめあげた」とするような受け身の歌姿勢ではなく、羈旅に往来する人々が漠然と抱く思いを、具体的な景として表現しようとする姿勢がうかがわれる。披露された歌にそのような趣向が凝らされていればこそ、聴衆は歌を十二分に楽しむことができたのであろう。金村にとって「妹背乃山」と記す表現は、作歌の構想を支える歌語であったといえる。その主題化にもつとも効果的であったのが「娘子に詠へられて作る」との方法であったと考えられる。功を奏して「妹背乃山」との表記と表現が定着してゆくのであろう。

前掲の金村歌（4・五四三〜五四五）には、もうひとつ注意しておかねばならないことがある。紀伊国を代表する景物として「まつち山」と「妹背の山」のふたつを一首の中に詠み込んでいることである。

麻衣着ればなつかし紀伊の国の妹背の山に麻蒔く我妹

麻衣 著者夏樞 木國之 妹背之山二 麻蒔吾妹 （7・一一九五）

右の歌は、上句に直接詠み込まれていないが、「麻衣着ればなつかし紀伊の国の」との内容には、「亦打山」或いは「又打山」と表記されたまつち山を想起することが難しくない。その「麻衣」は、「妹背の山」の妹と結びついて「麻蒔く我妹」が導き出されていることが注意される。下河辺長流『万葉集管見』や契沖『万葉代匠記』が指摘したように、紀伊国の実景を表現したものになり得るのか。

一一九五番歌は、左注に「右の七首は、藤原卿の作なり。未だ年月を審らかにせず。」と記し、次の歌とともに併記されている。

（羈旅にして作る）

山越えて遠津の浜の石つつじ我が来るまでに含みてあり待て

山超而 遠津之濱之 石管自 迄吾来 含而有待 （7・一一八八）

大き海にあらしな吹きそしなが鳥猪名の湊に舟泊つるまで

大海尔 荒莫吹 四長鳥 居名之湖尔 舟泊左右手 (7・1189)

舟泊ててかし振り立てて廬りせむ名子江の浜辺過ぎかてぬかも

舟尽 可志振立而 廬利為 名子江乃濱辺 過不勝臈(7・1190)

妹が門出入の川の瀬を速み我が馬つまづく家思ふらしも

妹門 出入乃河之 瀬速見 吾馬爪衝 家思良下 (7・1191)

白たへにほふまつちの山川に我が馬なづむ家恋ふらしも

白袴尔 丹保布信土之 山川尔 吾馬難 家恋良下 (7・1192)

背の山に直に向かへる妹の山事許せやも打橋渡す (7・1193)

勢能山尔 直向 妹之山 事聴屋毛 打橋渡

紀伊の国の雑賀の浦に出で見れば海人の灯火波の間ゆ見ゆ

木国之 狭日鹿乃浦尔 出見者 海人之燎火 浪間従所見

(7・1194)

右の中で一一八八番歌の「石つつじ」には、寓意を認められなくないが、地名と景物が優先して詠まれている。一一八九〜一九〇番歌も、それぞれに「鳥猪名の湊」と「名子江の浜」の地を詠むことが主眼となっている。

一一九一番歌には「妹」が詠まれているものの、下句の「我が馬つまづく家思ふらしも」は、一一九二番歌の下句に「我が馬なづむ家恋ふらしも」と詠まれていることと合わせ、「まつちの山川」を境に大和の家の妹を思いやっていると解すことができる。一一九三番歌は、打橋に関心を向けて妹背の山が結ばれる経緯を詠んでいる。一一九四番歌は、再び「雑賀の浦」の地に見える景を歌に表している。その後に見出される一一九五番歌だけに作者の恋の相手を具体的に見出すことは難しい。「藤原卿」は房前とも麻呂ともいわれる⁽¹³⁾が、「娘子」を誰とも特定することができない。「娘子」とのみ詠まれている様子からは、「娘子」も歌に表現された景の一部と捉えるべきであろう。

このようにみると、下河辺長流『万葉集管見』や契沖『万葉代匠記』

が紀伊国を代表する特産物として見出した「麻裳」は、くり返された作歌に育まれた景の典型であったといえる。

一一九五番歌に導き出された景は、「まつち山」と「妹背の山」とを一首に結び得た「神亀元年甲子の冬十月、紀伊国に幸せる時に、従駕の人に贈らむがために、娘子に詠へられて作る歌一首 并せて短歌 笠朝臣金村」(4・五四三〜五四五)の影響の大きさを考えずにはいられない。

三、万葉風土論の位相と歌が形象する景の在り方

「妹背の山」は、勢能山(背の山)の傍らに「妹」が希求され、観念的に生み出された景である可能性を述べてきた。しかし、歌に詠み込まれた地名には、臨地に具体的な所在を特定しようとする議論が存在している。

犬養孝「妹と背の山考―旅ごころ―」⁽¹⁴⁾が、

「妹の山」の所在については異説多く、詞のあやのみで実在しないとするもの(『玉勝間』等)、背ノ山の二峯のいづれかとするもの(本居内遠『妹山背山弁』)、背ノ山と一溪流を隔て背ノ山と並んで紀ノ川北岸にあるとするもの(『新考』)、紀ノ川南岸で背ノ山と相對した伊都郡見好村西洪田(現在、伊都郡かつらぎ町に属す)に属する長者屋敷といはれる丘とするもの(『紀伊続風土記』等)等諸説があり、なほこれについては後述するが、五万分の地図に妹山(二四メートル)とある

続風土記の説の長者屋敷の丘と見るべきである。⁽¹⁵⁾と記す内容が知られる。最近では、村瀬憲夫「妹勢能山一詠の諸問題」⁽¹⁶⁾がこれを検証して、「長者屋敷説は、古今集の歌の影響によるのであろう」と指摘し、「妹勢能山は背山の二峰を詠んだものであると見るのが最も適切である」と詳述した。ここでは、こうした地理を特定する議論の経緯と意味の確認から検証をはじめたい。

「妹背の山」の所在は、平安期に歌語の注釈が進み、歌枕への関心が深

まる中に問われはじめる。顕昭『袖中抄』巻第十四「イモセノヤマ」(16)は「ナガレテハイモセノヤマノナカニオツルヨシノ、カハノヨシヤヨノナカ」を引用しながら、

顕昭云、イモセノヤマトハ紀伊国ニアリ。吉野川ヲヘダテ、イモノ山セノヤマトテフタツノ山ノアルナリ。昔イモト、セウト、河ヲヘダテ、中ノサカヒヲ論ジケリ。遂ニ妹カチテセノ山ノ方チカク掘テ吉野川ヲバナガシタリトイフ。彼イモトセウト、此ノ二ノ山ノウヘニタテルニヨリテ此名ヲツケタリ。但此イモノ山セノ山ノ中ニ小山アリ。ソレヲイモセ山トイフトゾ彼国ノ土民申ケル。オボツカナシ。考万葉云、セノヤマニタヅニムカヘルイモノヤマコトユルスマウチハシワタルノコレヤコノヤマトニシテハワガコフルキチニアリテフナニヲフセヤマノワギモコニワガコヒユケバトモシクモナラビキシカモ妹与勢能山此等ノ歌ノ心ナラバ。イモノ山セノ山別欵。(以下略)と記す。

その後、江戸時代に入り国学が隆盛することにより、常に妹背山とつゞけていへは、只ひとつの山の名のやうに、大かたの人思ふめり。然らず。万葉に、人ならば親のまなごそ朝もよいきの山のへの妹と背の山、又兄の山にたゞにむかへる妹の山ことゆるすやも打橋わたすとよめり。紀の川を隔て、兄山は北にあり。ちひさき嶋なり。所のもの、舟岡山となん申し習へり。妹の山は(川の)南に、(すこし)異の方にあたりて相向へるを、引合せていもせ山とはいふなり。吉野川の末、紀川となりて、両山の間を過るほどを、妹背川といふ。流てはといへるにて、中に落る吉野川といふことわりかたず。妹背山、吉野にあるやうによめる歌ともは、万葉を能見す、又なかれてはといふに、心をつけぬなるへし。

契沖「妹背山川」『勝地吐懷編』上(17)

「二上山も妹こそありけれ」とよめるも、二上山に、まこと妹といふがあるにはあらねど、峰二つあるによりて、まうけてきはよみつるなれば、きの国なるも兄の山といふ名につきて、さもいふべきこと也。

本居宣長「妹背山」『玉かつま』九の巻(18)

のごとく検討が進められるようになる。これに加えて、江戸期には各地に名所図会が作成されてゆくように、地域にも名勝地への関心が広がり、元来背の山と云るは、此所にて両岸の山相狭て、咽喉をなせるより、往古畿内の界ともせられ、いまも伊都那賀の郡界ともなれば、迫山と云てありしを、此山の峯ニツありて、相並し形象あるより、風騷の士、その元来の迫の山の名を、妹妹の義に取なして、詠じ来れるより、名高くなりたれども、此山を総ていふには、背の山と従来のまゝに云もし、物に記しもする事にて、妹の山背の山と云るは、文人の詞章にのみ最初は云て、何の方の峯を妹の山とも背の山とも、定めて喚分たるには非ず、只峯ニツあるより云るなれば、後々までも、背の山の名は従来のまゝに、山の名にも村の名にも残れるを、妹山は確に何と定めたる方なければ知らずなりて、(以下略)

本居内遠「妹山背山弁」『本居内遠全集』(19)

との発言が見られるようになる。本稿の「はじめに」に触れた万葉風土論は、いわばその延長に展開されてきた議論と位置づけることができる。

万葉歌そのものに地理を探してみると、

(羈旅にして作る)

妹に恋ひ我が越え行けば背の山の妹に恋ひずであるがともしさ

妹尔恋 余越去者 勢能山之 妹尔不恋而 有之乏左(7・二一〇八)

は、家に残してきた妹を恋い慕いながら、越え行く「勢能山」を捉えて、「妹」に恋をしないでいられることを羨ましいと詠んでいる。「妹の山」の存在が明確に詠まれているわけではない。「越え行けば」との表現は、

我妹子に我が恋ひ行けばともしくも並び居るかも妹と背の山

吾妹子尔 吾恋行者 乏雲 並居鴨 妹与勢能山 (7・2210)

と、より観念的に「恋ひ行けば」と表現されてもいる。「妹の山」の所在も「並び居るかも」と、疑問をともなつて表現されている。「妹山(妹の山)」の存在は希求されているが、確かな所在を示すようには表現されていない。それは、

妹があたり今そ我が行く目のみだに我に見えこそ言問はずとも

妹当 今曾吾行 目耳谷 吾耳見乞 事不問侶 (7・2211)

にしても、「妹があたり」と漠然としている。残してきた妹が立ち現れることが求められている。

(山を詠む)

紀伊道にこそ妹山ありといへ櫛上の二上山も妹こそありけれ

木道尔社 妹山在云 櫛上 二上山母 妹許曾有来 (7・2098)

右の歌についても、「妹山ありといへ」と伝えるだけで、眼前に妹山を捉えているわけではない。勢能山を通り過ぎる際に、眼前に妹山を思いやり、寄り添う景として「妹山」の存在が求められることに気づかされる。わずかに次の歌だけが、

(羈旅にして作る)

背の山に直に向かへる妹の山事許せやも打橋渡す (7・2193)

勢能山尔 直向 妹之山 事聴屋毛 打橋渡

と、背の山(勢能山)に対して「直に向かへる」と所在を示しているのが留意される。見てきた歌が両者の関係を「ともし」と、仲むつまじく捉えていたのに対し、「事許せやも」と妹の姿勢に疑問が示されている意味で、異なる視点から詠まれているところに特徴が見出される。それまでの歌と見ている対象が異なるのではないかとの印象さえ受ける。とはいえ、「打ち橋」が実景として何を捉えているのかを歌の内容から判断することは難

しい。多様な着想が駆使されている様子がうかがわれる⁽²⁰⁾。勢能山を見る視野の中に「直に向かえる」との位置に見出されるのが「妹の山」となる。

紀伊の国の 浜に寄るといふ 鮑玉 拾はむと言ひて 妹の山 背の

山越えて 行きし君 いつ来まさむと 玉梓の 道に出で立ち 夕占

を 我が問ひしかば 夕占の 我に告らく 我妹子や 汝が待つ君は

沖つ波 来寄る白玉 辺つ波の 寄する白玉 求むとそ 君が来まさ

ぬ 拾ふとそ 君は来まさぬ 久ならば 今七日だみ 早からば 今

二日だみ あらむとそ 君は聞こしし な恋ひそ我妹(反歌略)

木国之 浜因云 鮪珠 将拾跡云而 妹乃山 勢能山越而 行之君

何時来座跡 玉梓之 道尔出立 夕ト乎 吾問之可婆 夕ト之 吾尔

告良久 吾妹児哉 汝待君者 奥浪 来因白珠 辺浪之 縁流白珠

求跡曾 君之不来益 拾登曾 公者不来益 久有 今七日許 早有者

今二日許 将有等曾 君者聞之ニ々 勿恋吾妹 (13・3328)

右の歌には、「妹の山」が「背の山」とは別に捉えられている。しかし、作者に相当する「我妹子」は、そこを越えて「行きし君」の帰りを待つていたのであつて、山を眼前にしているわけではない。

つまり、『万葉集』の中に収められた歌の中には、勢能山を越えゆくこ

とは認められても、「妹の山」をここだと特定するような表現を認める事が難しい。勢能山の傍らに妹が希求されるところに並び立つ、或いは「直に向かえる」ことが求められている。歌の中に形象された景として表現されたのが、表記を含めて「妹背乃山」であつたと捉えるべきであろう。

平安時代以降になると、歌の注釈や歌枕の議論が盛んになることによつて、その所在が具体的に問われるようになる。国学の隆盛や地域の名所への関心が高まり、所在地への議論が活発化される中に万葉風土論が誕生した。そうした議論に誘われて、臨地を訪ねていえることは、古南海道の特

定が優先される。臨地の景観は、歩く位置によって大きく変化するためである。万葉歌の中に形象された「妹の山」は、古南海道を往来しながら、眺めやる勢能山の傍らに希求され位置することになる。

おわりに

万葉歌をたどる限り、古南海道に紀伊国への旅は概ね楽しいものであった様子がうかがわれる。まつち山や勢能山は、大和にいる間から見ることが羨望されていた国境の山であり、機内外を区別する山であった。

「あさもよし」との枕詞は、当初、早朝に紀伊国へ足を踏み入れることへの歓喜と祝意をもって、「朝毛吉」或いは「朝裳吉」と記されていた。これが「紀伊」は「木」と記され、越え行く「まつち山」が「亦打山」或いは「又打山」と記される中で、紀伊国は衣豊かな国と連想されてゆく。奈良時代に入ると、「あさもよし」には、「麻裳吉」との表記が加えられてゆく。

その先に畿内の南限とされた勢能山は、「背の山」と見なされ傍らに「妹」の姿が希求されてゆく。それは実景の中に「妹の山」を明確に捉えるものではなく、羈旅において詠まれた歌の中に憧憬されていた。「妹背の山」(妹背乃山)は、その象徴として成立した歌語だといえる。

「まつち山」と「勢能山」は、「神亀元年甲子の冬十月、紀伊国に幸す時に、従駕の人に贈らむがために、娘子に逃へられて作る歌一首 笠朝臣金村」(4・五四三〜五四五)によって、ひとつの旅の中に結ばれてゆく。そこに見出されたのが、

麻衣着ればなつかし紀伊の国の妹背の山に麻蒔く我妹

麻衣 著者夏樫 木國之 妹背之山二 麻蒔吾妹 (7・一一九五)

との景である。それは万葉の時代に、現地で展開されていた風土や景観そのものではない。「万葉歌風土」とでも呼ぶべき、作歌の中に育まれた世

界として存在する。笠金村歌(4・五四三〜五四五)は、これを積極的に展開した意欲的な作であった。

「妹の山」を地理的に求める志向は、平安時代に入り、万葉歌への注記が加わり、歌枕への関心が深まる中に特定されることが求められてゆく。江戸期の国学の隆盛と、名所図会に認められるような景勝地への関心が広がる中で、議論は地域を含めて活発化した。万葉風土論はその延長に位置づけられる研究となる。そうした享受史に誘われてフィールドワークを樂しむ時、私たちがもつとも注意を払わなければならないのは古南海道の特定である。たどる道によって見ることのできる風景が大きく異なってしまうからである。歌の中に形象された「妹背の山」(妹背乃山)の景は、古南海道を旅する時、勢能山を眺めやる傍らに或いは向き合い見出される所に「妹の山(妹山)」が存在する。古南海道の道筋が時代ごとに変わるのであれば、見る位置によって「妹の山(妹山)」の存在もまた、変化してゆく可能性を流動的に捉えておかねばなるまい。

注

(1) 犬養孝『万葉の風土 続』塙書房 一九七二年一月。

(2) 田村泰秀編・富田俊子補『万葉二千三百碑』万葉の大和路を歩く会 二〇一八年四月。

(3) 下河辺長流『万葉集管見』(『万葉集叢書』第六・七集 臨川書店 一九七二年一月)。

(4) 契沖『万葉代匠記惣釈 枕詞下』精撰本(『契沖全集』第一巻 岩波書店 一九七三年一月)。

(5) 村瀬憲夫「あさもよし紀伊万葉」『万葉の歌—人と風土—』⑨和歌山 保育社 一九八六年八月。

- (6) 賀茂真淵『冠辞考』卷一（『賀茂真淵全集』第八巻 続群書類従完成会一九七八年六月）。
- (7) 村瀬憲夫「笠金村と紀伊」『紀伊万葉の研究』和泉書院一九九五年二月、初出は一九九一年一月。
- (8) 澤瀉久孝「枕詞を通して見たる人麻呂の独創性」『万葉の作品と時代』一九四一年三月 岩波書店。
- (9) 村瀬前掲(5)に同じ。
- (10) 村瀬前掲(7)に同じ。
- (11) 梶川信行「軽の道の悲恋物語」『万葉史の論 笠金村』桜楓社一九八七年十月、初出は一九七九年十二月。
- (12) 村瀬前掲(7)に同じ。
- (13) 村瀬憲夫「藤原卿の歌―藤原卿 藤原卿の歌」『万葉 和歌浦』求龍堂一九九二年一月。
- (14) 犬養孝「妹と背の山考―旅ごころ―」『万葉の風土 続』塙書房一九七二年、初出は一九六〇年。木下正俊（「妹背山女男の打橋」『万葉』第七三号 一九七〇年）房二〇〇五年六月。
- (15) 村瀬憲夫「妹勢能山詠の諸問題」『万葉集研究』第二十七集 塙書房二〇〇五年六月。
- (16) 顕昭『袖中抄』巻第十四「イモセノヤマ」（橋本不美男著『袖中抄の校本と研究』「本文篇」笠間書院一九八五年二月）。
- (17) 契沖「妹背山川」『勝地吐懐編』上（『契沖全集』第十一巻「名所研究一」岩波書店一九七三年八月）。
- (18) 本居宣長『玉勝間』九の巻（『本居宣長全集』第一巻 筑摩書房一九六八年五月）。
- (19) 本居内遠「妹山背山弁」（『本居内遠全集』第十二 吉川弘文館一九〇二年十一月。本稿は増訂再版一九二七年八月による）。

(20) 本稿では取りあげなかったが、「妹と背の山」には、

人ならば母が愛子そあさもよし紀伊の川の辺の妹と背の山

人在者 母之最愛子曾 麻毛吉 木川邊之 妹与背山

(7・一二〇九)

のように、独自の構想に基づいて詠まれた歌も残されている。

引用した『万葉集』と『日本書紀』は新編日本古典文学全集を、『続日本紀』は新古典文学大系をテキストにして、本稿に合わせて表記の一部を改めている。

※本稿は、美夫君志会において、二〇一六年一月に「万葉集を読む楽しみ―あさもよし紀人ともしも真土山―」と題し、二〇一七年一月には「歌の理解とフィールドワーク―紀伊国の妹背山の場合―」と題して口頭発表した内容を骨子としている。